

この世はすべて

舞台

男も女もみな

役者にすぎぬ

『お気に召すまま』(1599-1600)



登場人物

モンタギュー家

モンタギュー モンタギュー家の長。

ロミオ モンタギュー夫妻の息子。空想にふけりがち。

ベンヴェーリオ ロミオの従兄弟。若者同士の喧嘩を防ごうとするが、聞き入れられない。

バルサザー ロミオの従者。

キャピュレット家

キャピュレット キャピュレット家の長。ジュリエットの父で少なくとも60歳にはなっている。

キャピュレット夫人 ジュリエットの母。26歳前後。

ジュリエット キャピュレット夫妻の13歳の娘。

ティボルト ジュリエットの従兄。剣術自慢の短気な若者。

乳母 ジュリエットの年老いた乳母。愛情深く現実的な女性。

その他の人々

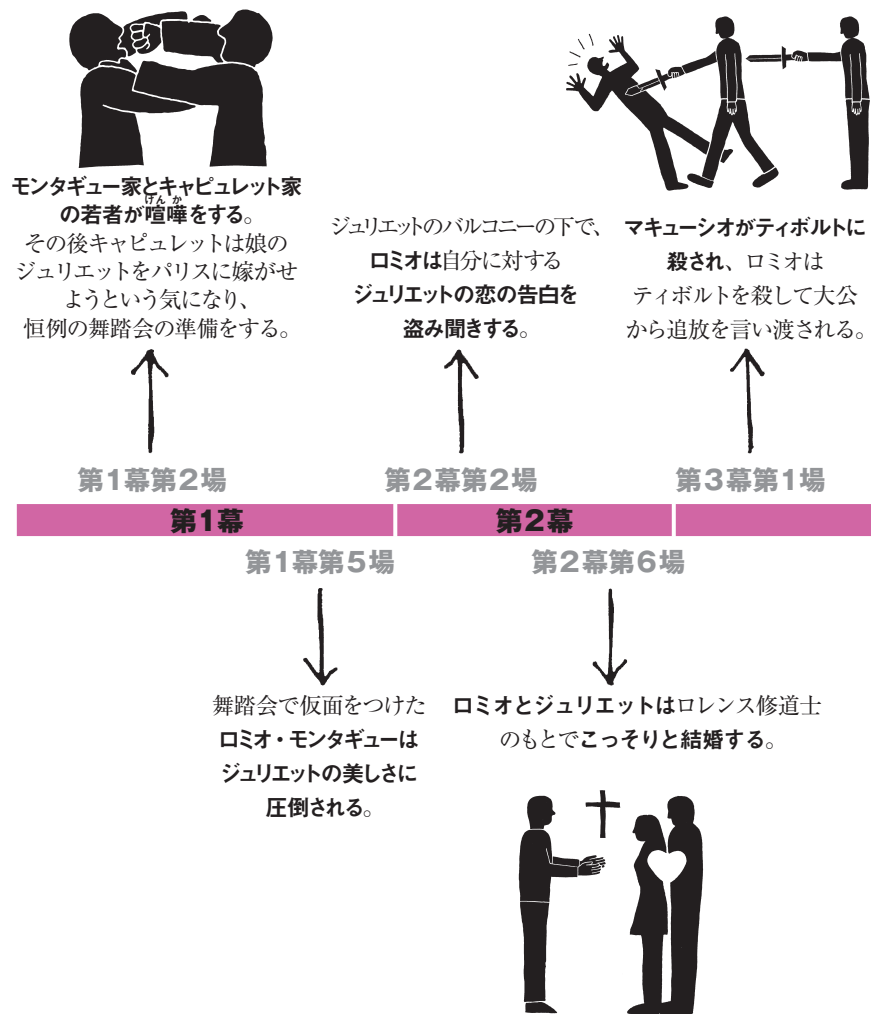
マキューシオ カリスマ性を持ち、ウィットに富む猿談好きなロミオの友人。

エスカラス ヴェローナの大公。

パリス エスカラスの親戚。ジュリエットとの結婚を望む、尊大でまっすぐな若者。

ロレンス修道士 フランシスコ派の修道僧で薬剤師。ロミオとジュリエットを秘密裡に結婚させる。

ベトルーキオ ティボルトの追従者。



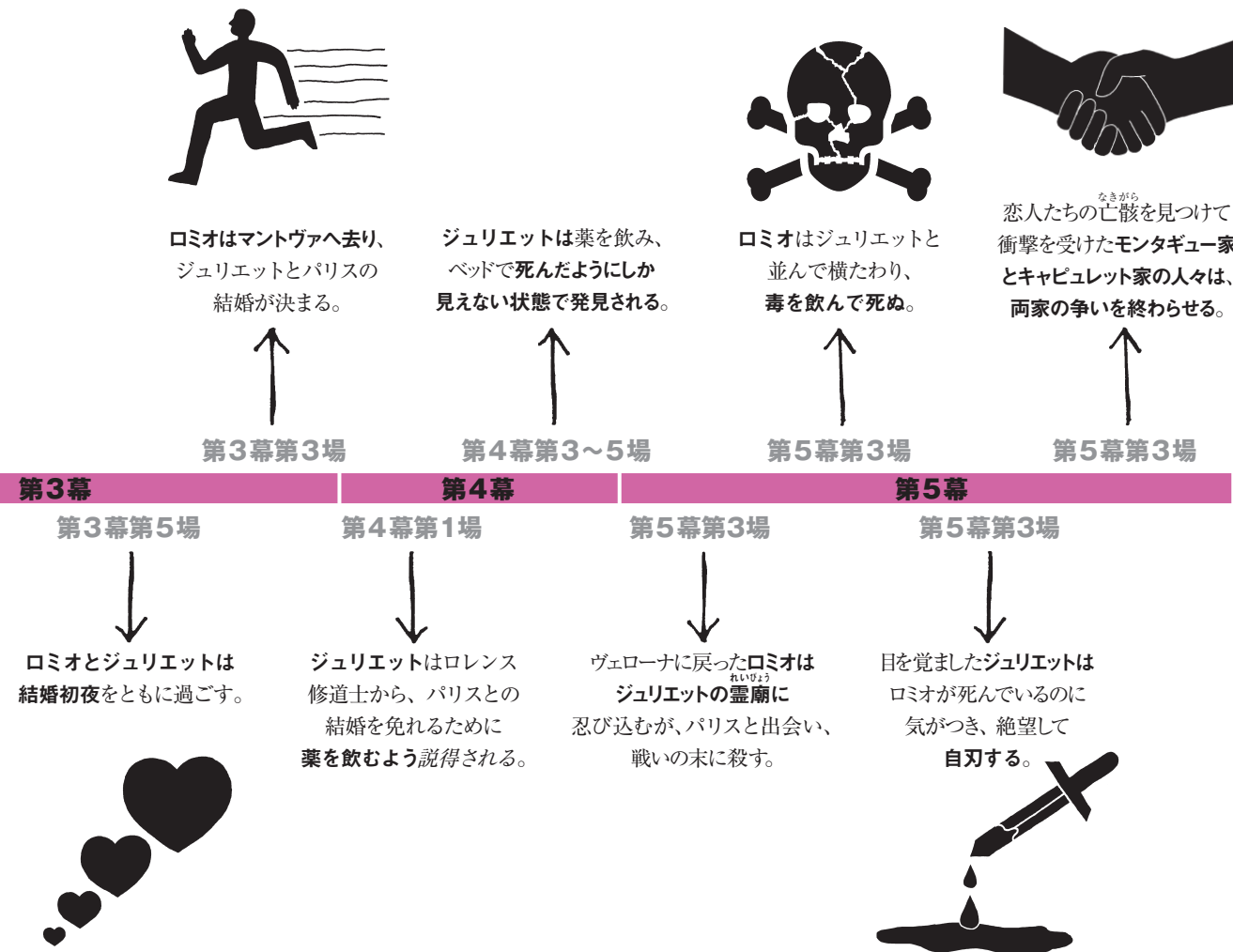
序 詞役（語り手）が出てきて、場面はヴェローナ、2つの名家が争う町だと言う。序詞役はまた、劇は2時間つづくこと、両家の2人の子どもたちの物語であること、2人の悲恋は死を迎え、最後に両家が和解に至ることを伝える。

そこで舞台は突然ヴェローナの通りに変わる。敵対するモンタギューとキャピュレット両家のあいだで喧嘩が起こり、ヴェローナの大公に仲裁されてようやく終わる。大公をなだめるために高齢のキャピュレットは、大公の若い親族パリスに13歳の娘ジュリエットを嫁がせることを考え、

恒例の仮面舞踏会にパリス伯爵を招待する。若いロミオ・モンタギューと友人たちは（茶化し屋マキューシオを含め）ロミオの片思いの相手ロザラインをひと目でも見ようと舞踏会に潜り込む。が、ロミオはロザラインの代わりに、その従姉妹のジュリエットに夢中になってしまう。

その夜遅く、ジュリエットのバルコニー下の果樹園に残っていたロミオは、ジュリエットが、ロミオがモンタギューという名前であろうとロミオを愛すると明言するのを盗み聞き、姿を表す。互いに夢中になった2人は、翌日の夜結婚する決意をする。

ロレンス修道士とジュリエットの乳母は、



この結婚が両家の諍いを終わらせてくれると願って、手助けすることに同意する。

翌日、通りでマキューシオがティボルト・キャピュレットを嘲り、2人は剣を抜き戦う。ロミオ以外は知らないことだが、ティボルトは今やロミオと義理の従兄弟となったので、ロミオは喧嘩をやめさせようとする。ティボルトがマキューシオに致命傷を負わせてしまう。仕返しにロミオはティボルトを殺す。そして、大公はロミオをヴェローナからマントヴァへ追放する。

老キャピュレットは、動揺する娘を見て、その理由がつかめないままパリスとの結婚話を進めなければと決意する。追

いつめられたジュリエットは、ロレンス修道士に助けを求める。修道士は結婚を免れるために眠り薬を飲むよう助言する。飲めば42時間死んだように見える薬だ。修道士はマントヴァにいるロミオに使いを出し、ジュリエットが目覚めたとき霊廟から救い出すように指示しようとする。ジュリエットはこの計画を進め、結婚式の朝、死んだようになって発見される。

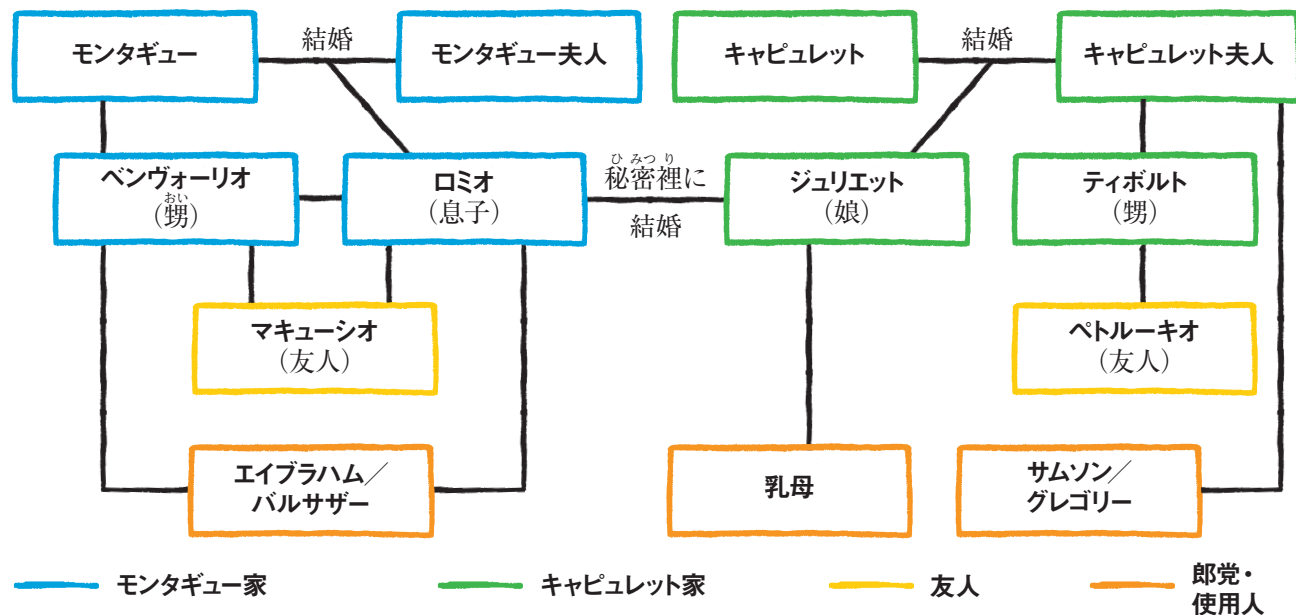
修道士からの使いはロミオに届かず、ロミオはジュリエットの死だけを知らされる。悲しみに打ちひしがれたロミオは急いでヴェローナに戻り、キャピュレット家の霊廟に忍び込むと、パリスに出く

わす。2人は闘い、パリスが殺される。

ロミオは生きていたとは見えないジュリエットの傍らに横たわり、毒を飲んで死ぬ。ほどなくしてジュリエットが意識を取り戻し、ロミオが死んでいるのに気づく。ジュリエットはロミオにキスをして、その唇から毒をもらおうとするが、死ぬことができず、ロミオの短剣を身に突き立てて絶命する。

3人の遺体が発見されたとき、ロレンス修道士が大公にこの痛ましい状況の説明をし、大公は両家の不和が招いた悲劇だとして非難する。老いた父親たちは手を取り合っ、敵対関係を終わらせることに同意する。」

ヴェローナの家同士の対立図



だいぶ違っている。ブルックは恋人たちに完全に批判的である。「不実な欲望に胸をときめかせ、親や友人の威信も助言も意に介さない不幸な恋人たち」だと言う。しかしシェイクスピアは彼らに寄り添う。ロミオとジュリエットは2人とも無垢な犠牲者——ジュリエットはまだ13歳

——だ。親たちの口論や辛辣さをはるかに超えて、恋の美しさと情熱のなかを高く舞い上がる。そうした寛大な思いやりが、シェイクスピア作品をとっても魅力的なものとし、そのメッセージは当年度肝を抜くものとなったのだ。

ブルックの詩の人物がほとんど定型なのに対して、シェイクスピアの方はずっと肉付けされていて現実味がある。シェイクスピアはまた、善意のロレンス修道士やおしゃべりな乳母など非常にいきいきとした脇役もつくり出している。ロミオの友人で頭の回転が速く、俗気たっぷりのマキューシオは丸ごと作者の創作であり、シェイクスピア作品のなかでも魅力ある人物に挙げられる。第3幕の初め、剣で戦ったマキューシオが死ぬと、喜劇から悲劇へ、舞台の空気が劇的に変化する。

舞台革命

シェイクスピアがこの物語をイングランドの舞台にかけたことがどれほど革命的だったか、今日では的確に評価するの

は難しい。当時は若い世代に、イタリア語の小説の人氣がだんだん高まっていた。シェイクスピアがこの作品を書いたときはまだ30歳前だったが、それまでこの手の物語を芝居にした者はいなかった。悲劇といえば、大がかりな背景で高貴な権力者や偉大な戦士にまつわるものがほとんどだった。この作品では主人公の2人はその時代の普通の10代の若者、特徴はただ2人の恋と話し方だけ、場所はあるありふれた町で、ヴェローナと呼ばれているがほかのどこでも変わりなかった。若いシェイクスピアの劇は、初期の悲劇によく見られるようなゆっくりとした展開の壮大なものではなく、ハイテンポで、徹底的で、^{わいざつ}猥雑だ。

序詞役が韻律の調った簡潔な言葉で大筋を語るところは、ブルックの物語と同様に、卑しむべき愛の教訓的な物語を用意しているように見える。だが韻を踏んだこの戒めが終わったとたん、観客は反目の状態にある無秩序な現実^{現実}に追い込まれる。まるできちんとした形の詩が、

ヴェローナの通りのほんとうの口論にすり替わったような具合だ。ひどくがさつな散文と無作法な身ぶりで、2組の郎党サムソンとグレゴリー、エイブラハムとバルサザーが猥褻な脅しをかわす。サムソンはモンタギューの女たちの処女を奪ってやるという意味で「乙女の首(メイデン・ヘッド)を切つてやる」と言う。

剣が抜かれ、戦いが始まり、両家の若い者が駆けつける。すぐに追いついた老キャピュレットが弱々しく剣を、同じように弱々しい老モンタギューにふるおうとする。うんと若い妻が、杖をふるうかのようにひ弱だとほめかす。ここは男らしさを誇示する無法な世界であり、分別のあるはずの年老いた者でさえ調子を合わせて剣をふるおうとする。賢明さや模範的行動は、ロレンス修道士やジュリエットの乳母の頼りない手に託される。

名前がなんだというの？

こうした機能不全に陥った町では〈名誉=名前〉がすべてであり、本当の実質や感覚が失われている。しかしのちにロミオとジュリエットのロマンスが始まると、ジュリエットは場合によっては名前が恐ろしい罠にもなることに気づいて、有名な嘆きのせりふを口にする。「ああ、ロミオ、ロミオ、どうしてあなたはロミオなの。……バラと呼ばれるあの花は、ほかの名前で呼ぼうとも、甘い香りは変わらない」(第2幕第2場)。ジュリエットは恋のために、名前という罠を超越する手段を得たいと切に願う。「ロミオ、その名を捨てて。そんな名前は、あなたじゃない。名前を捨てて私をとって」(第2幕第2場)。だが結局、2人の真の愛さえも名前を超越

同時代の観客ならマキューシオのなかに劇作家クリストファー・マーロウの面影を見出すことだろう。マーロウはマキューシオと同じように剣で刺されて、1593年に世を去った。この挿し絵は1903年のもの。

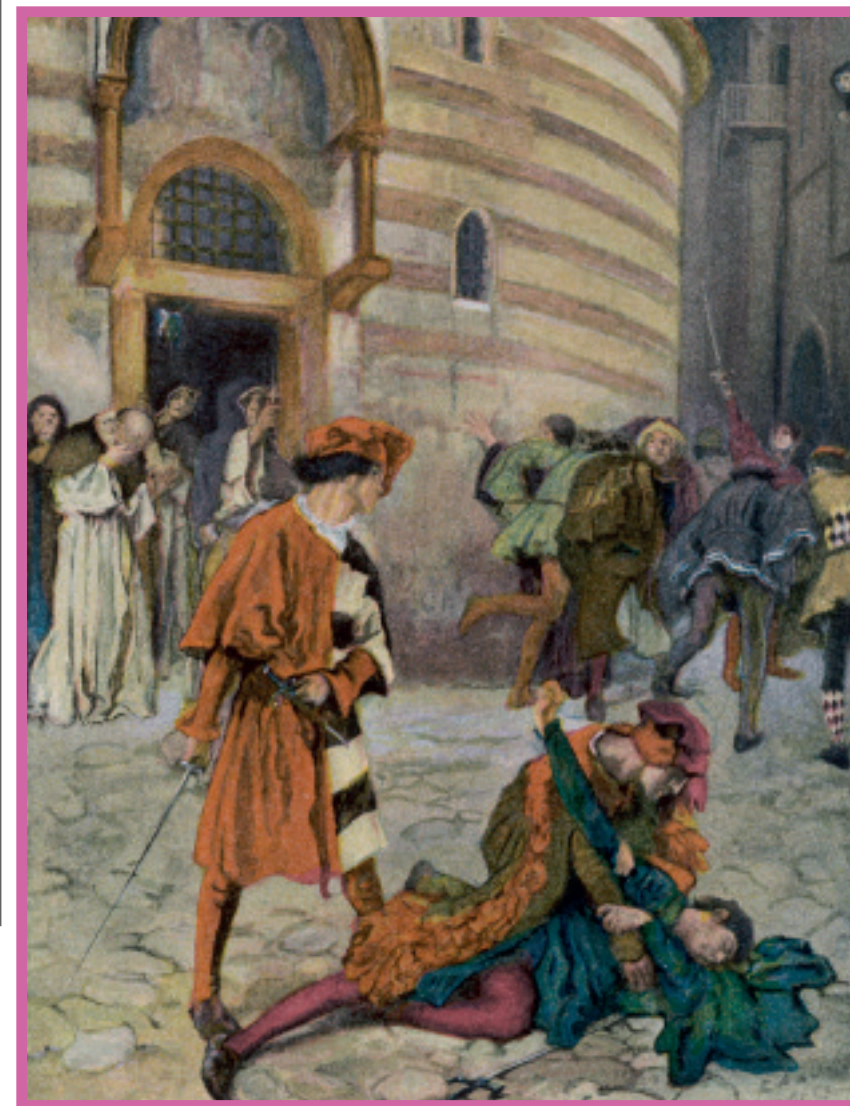
できない。「この忌まわしい体のどこに、その名前がついているのでしょうか」(第3幕第3場)。ロミオは追放処分が決まったあとでロレンス修道士にこう尋ね、さらに自分の名前に含まれる毒を理解し、名前から自分を引き離したくてたまらなくなる。名前が死の宣告となるのだ。

形から実体へ

そもそも偽りの名誉が重んじられるヴェローナの世界では、恋さえもひとつ

のポーズだ。ロミオが初めて登場するのは、喧嘩がおさまったあと、上の空でさまよっているときだ。彼は恋に落ちているが、ジュリエットにはない——まだ出会っていないからだ。相手はキャピュレット家のひとり、ロザラインという娘だ。彼女ははっきりと姿を見せることがなく、ロミオの恋に似て非現実的な存在だ。

いかにもイタリアのロマンスにふさわしく、ロミオはロザラインへの恋をソネットに歌う。ソネットは短い14行詩の形式



“ 私の気前のよさは、海のように果てなく、愛する気持ちも海のように深い。あげればあげるほど、恋しさが募る。どちらもきりがなく、ジュリエット 第2幕第2場 ”

場人物が自然のなかに旅をしてすべてを新鮮な目で見直し、感覚も新たに宮廷に戻ることができる。『シンペリン』の場合に異なるのは、文明の地ローマと粗野なウェールズのあいだに3つ目の場所があることだ——ブリテン宮廷である。あたかも、シンペリンあるいはブリテンが2つのどちらかを選択しなければならないかのように。

最終的には、シンペリンには選択の必要がなくなる。王はローマと和解し、ウェールズで育った息子が戻るのを歓迎する。ローマに反抗するようけしかけ、息子クロトンを行方不明の王子らの代わりに据えようとして不和を煽った妃は、死んだ。おそらく、和解が本作の眼目なのだ。王が「ローマとブリテンの旗をなかよく掲げよ。……速やかな和睦により、血まみれの手を洗う暇もない。かくもめでたき和平にて終わった戦はかつてない」(第5幕第5場)と言うとき、観客は自分たちの問題として理解しただろう。

同時代の反映

歴史的に見れば、本作の意味がより明確になる。ブリテンの魂を守るための戦いは依然として熾烈だった。プロテスタントが優勢ではあったが、カトリックもまだ大きな存在で、1605年の火薬陰謀事件が示すようにカトリック勢力が盛り返す恐れも現実的であった。ローマで、ポステュマスは、フランス人、スペイン人、そしてイタリア人(ヤーキモー)にもあそばれる——すなわち、主要なカトリック国それぞれから1人ずつである。当時カトリックのスペインからの独立戦争中だったプロテスタントのオランダ人は沈黙している。

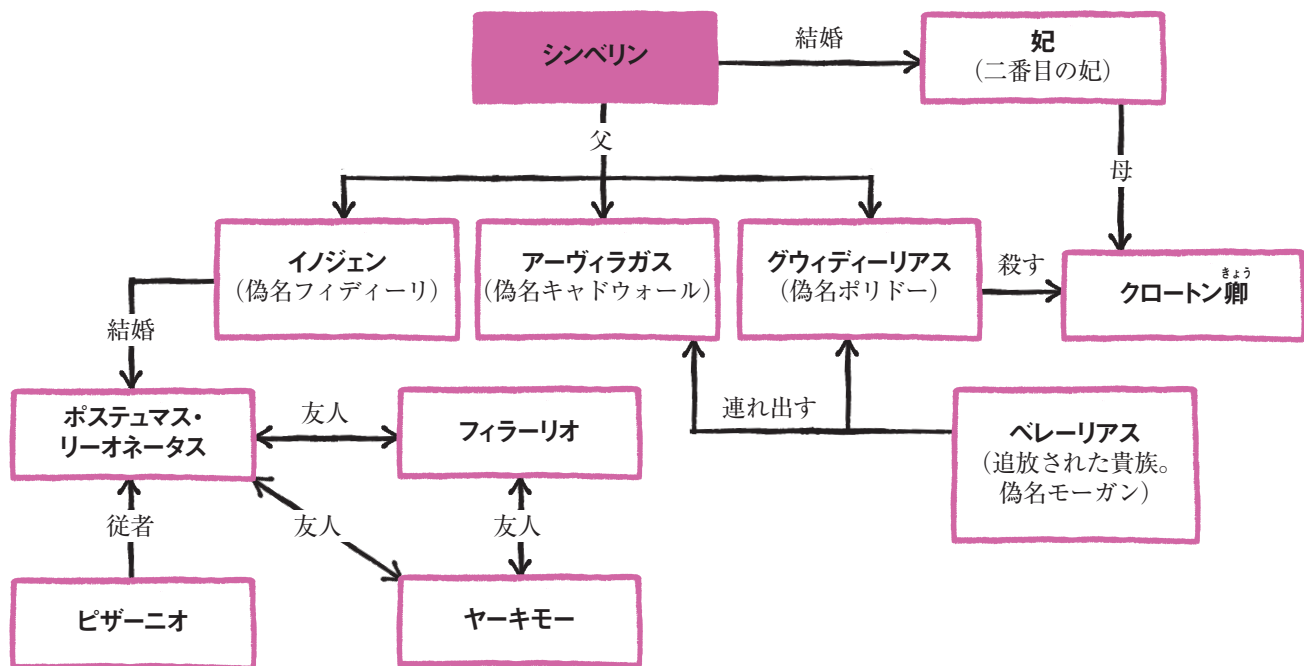
『シンペリン』がイングランドのジェームズ一世(スコットランドのジェームズ六世)の御前で演じられた可能性は大いにあり、王がこうした意味合いを見過ごすことはまずなかっただろう。作中のシンペリン同様、ジェームズはブリテン全土の王であり、イングランド、スコットランド、ウェールズ、アイルランドを1人の

“私に跪かないでくれ。君に及ぼせる私の力は君を赦すことだ。君への恨みは赦しとする。生きよ。人のためになるよう生きるのだ。”
ポステュマス
 第5幕第5場

君主のもとに初めて統一した。さらにシンペリンと同じく、息子が2人と娘が1人いた。そして、終幕のシンペリンと同じく、ジェームズはまさにその当時、ローマとの和解の道を探っていたのである。

同時代の観客は、『シンペリン』において決定的な介入がウェールズから来る

シンペリンの宮廷



2012年、ロンドンのバービカン劇場での蜷川幸雄演出による日本語上演。吉田鋼太郎(中央)は、シンペリン役を叙事詩的な気高さで演じた。大胆に、ストレートに物語を語るスケールの大きな演出。



というポイントを見逃したはずはない。ウェールズは、ジェームズが1603年にエリザベス一世の跡を継ぐまでイングランドを統治していたテューダー朝の父祖の地である。展開の焦点は、西ウェールズのミルフォード・ヘイヴンだ。この町は、古代ローマとも古代ブリテンの歴史とも何も関係がないが、ヘンリー・テューダーがようやく薔薇戦争に決着をつけてテューダー朝を開くために上陸した場所である。シェイクスピアの時代のイングランドで、なお轟いている地名であった。

歴史と神話

もちろん、ローマとは、ポステュマスにとって同時代の町であるばかりでなく、古代ローマ、皇帝アウグストゥスのローマでもあって、ブリテンを含むヨーロッパの大半がまとめられて比較的平和だったローマ帝国のバックス・ロマーナの時代を象徴している。それはまた、古典的な神々の時代でもある——しかも、ポス

テュマスの夢に現れて正義とイノジェンの復活を約束するのは、ローマの神ユピテル(ジュピター)だ。事実、イノジェンの解放は、ケルト神話が深く浸透したウェールズからやってくる。劇の終わりで、シンペリンはルッドの町からユピテルの神殿まで行進しようと約束している。ルッドの町とは、ケルト時代のブリテン王であり神話の神ルッドに因んで命名されたロンドンの町のことだ。

プロットのこんぐらかった結び目がすべてほどける最終場もまた、かつては荒

唐無稽と批判されてきた。しかし、現代では批評家たちはそれが舞台上では目もくらむほど効果的だと口をそろえる。ヤーキモーの告白や、イノジェンに走り寄るポステュマスの苦悶の叫びに感動しないのはほとんど不可能だ——その後、すべてが明るみに出て、恋人たちが再び結ばれ、王は行方不明の息子を発見し、全員が和解し、しかし邪悪な妃は都合よく死ぬ。そこに込められたメッセージは、いかにあり得なさそうでも望みさえすれば平安と赦しがあり得るといったことのようなのだ。■

ヤーキモーとイノジェン



イノジェンの寝室に忍び込むときのヤーキモーの独白には、耳を欺く優しさがある——そして、一部の批評家が主張するとおり、観客を犯行に加担させる。

イノジェンの部屋に置かれたトランクのなかから出てきたヤーキモーは、眠っているイノジェンを印象的な繊細かつ詩的な言葉で形容する。「この部屋をこんなに芳しくしているのは、この人の息だ。蠟燭の炎がこの人に頭を垂れ、瞼の下を覗き込み、その奥の光を見ようとしている。青空のごとき白き空色の窓の向こうから差し込まんとする光を」(第2幕第2場)。イノジェンの胸元の特

徴的な印、誘惑に成功したという主張の証拠「九輪桜の花びらの奥にある深紅の点」は、まことに自然で純粋な表現なので、ヤーキモーが部屋に忍び込んでいることをつい忘れてしまう。

ヤーキモーはその誘惑的な言葉によって、レイプさえも何か美しいものにねじ曲げようとする。彼は、自分の行為を古代ローマの王ターキーンが貴族の婦人ルークリスを残忍に凌辱したことになぞらえ、それがまるで優しい行為のように語る。この詩的ボルノグラフィは、深く心乱れる語りとなる。